

それであんなに燃えたのかもしれませんが。

お寺の本堂の縁側にも焼夷弾が落ちたが、瓦屋根だからでしょう穴があいただけで燃えなかった。

小西さん宅も押入れに落ちたらしいが、燃えることはなかった。

私の家には屋根裏の藁の中に落ちたせいでいっぺんに燃えてしまったらしい。

おそらく中西金属を狙ったものが、ほんのちょっと外れてこちらに落ちたということなのだろう。

仁和寺にいる夫の妹は、葛原は全滅かと思うほどすごい煙が上がっていた、と見舞いに飛んで来てくれました。

着替えもなく衣類を持ってきてもらってとても嬉しかったです。

焼け跡は3日ほどで片付けました。

当時は何もない時で助け合うこともできず、ほんとに一からの出直しでした。

まあ食物は、おじいさん（義父）とおばあさん（義母）と私で百姓をしていたから、それほど不自由はせずどうにか暮らしていましたが、家が焼けてその晩から寝るところもなく、分家で世話になりました。

2歳の娘が毎晩お家に帰りたい、お家に帰りたい、といひましてね。

もうお家は焼けてないのよ、と言って、焼け跡まで連れて行って見せると得心するのですが、あくる晩になるとまた、お家へ帰ろう、と言う。

毎晩焼け跡まで連れて行きましたが、お家はパーやな、と言うようになってね。

最後には仕方ないと思ったのか、うん、と言ってくれましたが、それはつらいことでした。

その頃は川の水で消火しました。

それで消火のたびに水が減るので、普段は堰き止めて水の量を保っておき、いざ消火となるとその水を放水しました。

3軒の家と集会所が丸焼けになった時も水が足りなかったので、類焼を防ぐために近くの中西さん宅が放水されて水浸しになったとも聞いています。

私どもも家は焼けたが田植えはしなければならない。

それで近所の農家に嫁いだ姉さんが、自分の家の田植えがすむと手伝いに来てくれて、どうにか田植えもできました。

9月になって赤川に爆弾が落ちて、地面に穴はあいたが燃えることもなく、あまり痛みもない家があるので買わないか、と言う話があったので、おじいさんが見に行き、